海猫０１

起

　西暦２０ＸＸ年、ついに第二次関東大震災が発生！首都圏は壊滅。都市機能は完全に麻痺状態となった。住民の半数近くが地方へ疎開する中、人心は荒廃し、犯罪が横行、治安の悪化は極限状態に達した。 事態を憂慮した政府は突如、非常令を宣言、治安担当行政機関『特務庁』の新設を発表した。 特務庁の実働部隊、治安局（通称海猫）は次々に強権を発動。秩序の回復と安定を達成し市民の一定の支持をえたものの、同時に一般警察以上の権限を獲得していき、やがて強大な権力を有した秘密警察組織へと変貌を遂げていったのである。

女子大社会科学研究会

　首都圏のＲ県に位置する、とある丘陵を切り開いて仙花女子大学のキャンパスは広がっていた。世界的に著名な建築家に依頼して設計された超近代的な校舎が、日本の典型的な田園風景に唐突に出現している。とくに夜になるとその印象は際立ってくる。校舎本棟や、教授棟、

それに学生棟――尖塔や螺旋構造を大胆に取り入れた校舎が黒いシルエットとしてそびえ建ち、おぼろげな月の明かりに浮かんでは消えして、蛙や夏の虫の音をＢＧＭにしているのだ。
　もとはといえば青山の一等地に本拠を構えていた仙女大であるが、震災後、劣化した都心の環境に促され、他の多くの大学と同様、移転に踏み切ったのである。が、都会の利便性になれた学生たちには評判はいいとは言えない。とにかく午後五時を過ぎればただでさえ少ない商店はほとんど閉まってしまうから、学生たちはサークル活動もそこそこに家路に着かねばならなかった。
　時刻が九時を過ぎようとしているこの時間になれば、学生の姿はまったくといっていいほど見られない。東京へ向う最終電車はそろそろ駅を出る頃だし、車を持っている学生ならとっくの昔に帰宅しているか恋人のところへ到着しているだろう。教授棟で明かりがついているのも二三の部屋にすぎず、まして学生棟に明かりなどは――いや、明かりが漏れている部屋がひとつだけあった。西側の七階にある部屋で、カーテンは締め切られているが角度によっては照明がついているのが見て取れる。大学関係者ならばその部屋が文科系サークルに割り当てられた一室であるのがすぐにわかるに違いない。
　そして大学関係者でなくとも、その部屋で誰が、何をしているか、逐一掌握している人間たちがいたのだ。

『特務庁治安局第四課』
特務庁直属の、いわゆる秘密警察で、通称『海猫』のメンバーである。私服の彼らは闇に紛れ、すでに学生棟の出入口を固めていた。この蒸し暑い熱帯夜に律儀にスーツを決め込んだ者もいれば、派手なアロハシャツを着て、似合わないパナマ帽をかぶっている者もいる。服装はそれぞれだが、一様なのは耳に交信用のイヤホンを入れているのと、手にサイレンサー付きの自動小銃を持っているところである。
「課長、すべて完了しました。踏み込みますか、どうぞ――」
学生棟正面入り口を照らしている白熱灯の、影の部分に張りついていた男が労務者風のジャンパーの襟に付いている超小型マイクにひそひそと話し掛けた。
一瞬の間ののち、
「了解――」
するとその声を待っていたかのように、十数人の男たちが淀みなく学生棟に忍び込んでいく。彼らは三つのグループに分れた。ひとつはエレベターホールに向い、もうひとつは階段を駆け上がり、最後のひとつが非常階段を上りはじめる。
どのグループも目指すは七階のあの一室だ。そこには国家にたてをつく反抗分子ども、公安秩序を乱すゲリラコマンドの卵、仙女大社会科学研究会に所属する痩せっ

ぽちの女子大生たちが不穏な密会に集っているはずなのだった。
　社会科学研究会部室――。
　ここには五人の若い女性たちがいて話に熱中している。椅子に座ったり机に腰掛けたり、あるいは立ったままだったりざっくばらんに話し合いは続いている。正確に言えば、四人が一人の話しに聞き入り、ときおり質問をするといった具合のようだった。
　学生棟は八時半をすぎると、冷房が切られる規則になっている。扉も窓も締め放しになっているので、部室のなかはサウナ風呂のようだったが、討論が終わる気配などなかった。
　「だけど……」
　と、言葉を返したのは社会科学研究会の部長で四回生の高橋ミカだった。彼女は椅子の背を胸に当てるように逆さに座り、講師格の女に対峙している。美しいロングヘアをセンターパートにして胸や背中まで垂らしている。その芳香匂い立つような黒髪に包まれたミカのハーフのように彫りの深い美貌は室温に赫く上気してすっと上向きの鼻やまだ少女の面影も残るピチピチとした頬、尖るほどでないなだらかなラインの顎に汗が浮かんでいる。が、その大きなの瞳にはきらきらとした情熱が輝き、理想を信じる若さが満ちあふれていた。
　白の半袖のブラウスからのびた細い二の腕を組んで、

洗い晒しのジーンズをはいたスラリとした下肢を踏張り、ミカは言葉を続ける。
「……そういう強攻策で、いったいどの程度の国民の支持をえられるのかしら」
「もうそんなことを言っている段階ではない、というのが私たちが下した結論よ」
ミカの正面の女、学生よりいくらか年長の女がりんとした声で言った。髪をすっきりとしたショートカットにまとめている。彼女もまた本来の色白の肌を桃に染めて、小鼻の脇やブルーのＴシャツから見える鎖骨の浮き上がりに玉の汗を光らせていた。切れ長の目にはどんなものにも屈しない意志の強さを湛えてい、ややふくよかに肉のついた丸い鼻はアイドルタレントのように愛らしい。けれどもぽっちりした唇の脇に色っぽいほくろがあったり、Ｔシャツの胸のふくらみや白のスラックスのはち切れそうな臀部には、学生にない女らしさが感じられる。
佐藤ゆり子はこの仙花女子大を三年前に中退している。ミカたちと同じように社会科学研究会の一員として活動し、ゲリラコマンドにのめり込んで地下に潜ったのだ。今はまだ学生たちのオルグを担当して飛び回っているが、将来を嘱望されている幹部候補生の一人らしい。
「特務庁の跳梁が目に余るのはあなた方も認めるでしょう」

ゆり子は四人を見回した。
「その犯罪行為は太平洋戦争中の特高を越えているわ。市民派の誘拐、拷問、洗脳、盗聴、撹乱、デマゴギー。それはもうひどいものよ。私たちのようなゲリラが彼らの手に落ちれば、裁判なしで惨殺されるのがオチね。とくに女は目もあてられないわ。海猫の局長は変態性欲者なんだからお話にならない……」
ゆり子は失笑気味に口もとを歪める。そういえばこの女たちは皆一様に化粧っ気がなかった。そしてほとんどがノーブラではないかと思われる。ミカなどは白いブラウスが汗に透けてきて乳頭の色かたちがうっすらと覗けるくらいだ。もっともこの女の乳輪は白人女や妊婦に匹敵するほど肥大していて、また日本女性特有の濃い色素の沈着を持っているから特別目立つのだろう。さらに彼女たちに共通するのはときおり半袖の口からかいま見える未処理の腋毛である。だからどうした、と彼女たちは言いたいのだろう。自然に生えてくるものを毎朝時間をかけて剃り上げるなんて、おしゃれの名のもとに男に迎合する遅れた意識の慣習にすぎまい――通学途中の満員電車の中で、吊り革に掴まる女子大生の、酸っぱそうな脂汗を含んだ腋毛を、びくつきながら盗み見る哀れな男たちを彼女たちは軽蔑するように見返してやるのだ。それが彼女たちの主張であり流行でもあるらしい。
「海猫の局長、野辺地大洋ね」

　ミカが言う。彼女はどうやら毛深い体質らしく、黒々とした腋毛がもじゃもじゃという感じで密生している。ひょっとすると本当に西洋人種の血が何パーセントか混じっているのかもしれない。
　「いつ聞いても派手な名前よね」
　誰かがクスッと笑った。
　「大洋の手下だから海猫ってわけなんでしょう。うまく付けたわね」
　緊張していた雰囲気がふっと和んだ。
　「ひどいものよ。あの男――」
　ゆり子は虚空を見つめるようにある思いに沈む。
　「知っているでしょう。この間もうちの女性幹部が奴らに捕まって……」
　その事件はもちろんミカたちの胸にも焼き付いている。ゲリラコマンドの女性幹部、山上朋子が海猫に拉致され、一週間後、東京湾に素巻きにされて浮かんでいるのを発見されたのだ。それは酷たらしい死体で、耳や鼻を削がれ、乳房を抉りとられていた。全身に生々しい拷問の疵がみられ、体内からは複数の男の精液が検出されもした。特務庁治安局では一時拘束して取り調べた事実は認めたものの証拠不十分で釈放、その後の消息は関知していない旨の見解を発表したのだった。
　「たしかにトドメを刺した実行犯は彼らではないわね」

ゆり子は口惜しそうに唇を噛む。
「玉枝一家……」
誰ともなく口にした玉枝一家とは、ようするに民間の私刑集団というところか。表向き在来型の暴力団とされているものの、実態は海猫の手の届かないところを補完するテロリストグループと思えばいい。とりあえず法律にのっとって行動しなければならない海猫と違い、玉枝一家は無法の法をもって暴力行為に及ぶものだから、狂暴さは格別だ。情報は海猫から筒抜けだし、法的な後始末も海猫がしてくれる。その幹部に特務庁ＯＢが入っているところからみても、海猫の別働隊といっても過言ではないだろう。山上朋子もきっと散々陵辱された後、海猫の収容所から放り出されたところを玉枝一家が誘拐して凶行に及んだのだと思われる。すべて出来合いの犯罪なのだ。
「いったい日本はどうなるのかしら……」
社会科学研究会の部員たちは暗澹たる思いに胸が締め付けられる。
「だからこそ――」と、佐藤ゆり子は声を高めて、拳を振り上げた。
「だからこそ、闘わねばならないのよ。我々は国民の自由と平和を守るために、時として非合法な戦術を使ってでも奴らの粉砕を目指さなければならないのよ。たじろいでばかりでは奴らの思う壺だわ、そうでしょう？」

異論のある女子大生はいない。ゲリラコマンドの武闘手段にやや懐疑的であった高橋ミカも今は意を決したように眦を吊り上げている。エキゾチックな美貌はますます冴え渡り、知的でしかも激情を内に秘めたこの女の人間的な美しさが、まさに華開いたようにカッと際立ちはじめていた。

その時、コンコンと軽いノックが部室のドアを叩いた。一瞬、牝鹿たちの身体に緊張が走り貌から血の気が引いていく。ドアのガラス窓はカーテンで仕切っているので、外は見えない。

「すんません。もうそろそろ校舎を閉鎖しなきゃならんのですがね」

聞き覚えのある用務員の声だ。東南アジア出身の移民で、独特のイントネーションがどこか親しみやすさを与える。ほっと安堵の息をする女たち。

「はい、わかりました、もうすぐ出ていきます――」

部長であるミカが答えた。

「あっ、部長さん、これ食わんかい。友達からもらったマンゴーだがね」

苦笑するミカ。

「ミカは彼に惚れられているのよ」

クスクス笑う部員たち。ゆり子も微笑んでいる。しょうがないわねぇと、ミカはガラス窓のカーテンから外を覗く。人のよさそうな初老の用務員が褐色の肌に白い歯

をくっきりと浮かび上がらせて笑っている。手に持った篭に新鮮そうなマンゴーが何個かのっていた。他には誰もいないようである。
　ミカはドアの鍵を開けた。
　ところがそこには用務員の姿がばったり消えている。
　「あら、どうした……」
　ミカは身体を廊下に乗り出し、辺りを見回して絶句した。蒸し暑さにほだされた彼女の貌が驚愕に蒼ざめていった。大きな瞳がさらに限界まで見開かれ、粒粒の汗がいっぱい浮いている鼻の下が見えなくなるほど口を開いて、なにかを叫ぼうとするが、まったく声にならない。彼女の視線のそこには屈強の男たちが銃をこちらに向けて、密集しているではないか。
　「痩せっぽちの女子大生さん、若い娘がはしたなく大口をあけちゃいかんね。赫い喉ちんこまで丸見えだよ。そんなヌケた貌は彼氏のあそこにしゃぶりつく時だけにするんだな」
　先頭のアロハの男がウインクした。
　「海猫……手、手入れよっ！」
　やっと叫ぶと、ミカは勢いよく扉を閉めようとする。間一髪、男の革靴が割り込んできてそれを妨げる。プロの計算された機敏な動作だ。
　「いやっ、何するのよっ」
　必死にノブを引き、開けられまいとするミカ。黒髪が

跳ねて頬や口もとに貼りついている。恐怖と憤激が入り混じった形相はぞくぞくするほど美しい。
　「電話よ！」
　他の部員を怒鳴りつけ、ゆり子はミカに加勢した。
　「駄目っ、妨害電波でかけられないっ」
　コードレスホンを耳に当てていた部員が半ベソを掻きながら、おろおろしている。
　「ちくしょうっ、卑怯者っ」
　ゆり子は罵りながら足を踏張るが、女二人の力ではどうしようもない。わずかな隙間に男の手がいくつも差し込まれて、徐々に徐々にこじ開けられていく。
　「無駄な抵抗はやめるんだな、牝豚ちゃん。おとなしくお縄につけ。豚は豚らしく豚小屋に連れてってやる」
　アロハの男がにやにやしながらこちらを見ている。ゆり子もミカも美人なのでこたえられないといった表情だ。
　「令状なしの捜査は違法よっ、不法侵入だわっ。むむっ……」
　「さすがは法学部だ。ここを開けたら見せてやるって……そーらよ！」
　男の力が一気に勝って、ドアが開け放たれた。どどっと押し入ってくる捜査員。女数人の場所のガサ入れにしては尋常でない人数だ。部室はあっという間に足の踏み場もなくなった。それに圧倒されるように、ゆり子と女

子大生たちは壁際に押しつけられる。大きな男たちの身体が触れ合わんばかりに迫ると、それだけで威嚇される。しかも銃口は鼻先につきつけられているのだ。
　「ふん、手間取らせやがって。非国民どもがっ。よしっ、両手を頭において脚を開くんだっ」
　大声でがなるアロハの男。土気色の顔面が蒼白になるほど興奮してこめかみの血管が浮き上がっている。この時のために俺はこの仕事をやっているんだとばかり、テンションが最大限に上がっているのだろう。ミカたちを凝視する他の捜査員も同様の感情を露出させている。
　「ヒヒ、班長、こいつ小便ちびりやがった」
　誰かが指差したのは小柄な、眼鏡をかけた部員である。彼女はまだ一回生だった。可哀相にぶるぶると震えて、唇の色も失っている。指摘されたとおり、ジーンズの、なだらかなデルタの股間から太腿の付け根の辺りが濃く染みになっていて、じっとり重くなっている。
　隣のミカが優しく肩を抱くとその部員は嗚咽しながら、ミカの胸に貌を埋めた。
　「さあ、捜査令状を出しなさいっ」
　ゆり子が班長と呼ばれた男を睨みつけ、キッとした表情で言った。
　「うるせい！　危険分子のお前らにうかつに見せられるもんじゃねぇんだよっ。さっさと言われたとおりにせんか！」

「出さないんなら、従う義務はないわっ」
なおも咬みつくゆり子。班長がゆり子の貌をじろじろ舐めるように見ながらふんと嗤う。
（女コマンドめ。いきがりやがって。自分がこれからどんな目にあうか、教えてやったら、小便洩らすだけじゃ済まないだろうに……}
班長はよしっと言って胸ポケットから紙切れを取り出した。折り畳まれたそれをゆり子の眼前に開いてみせる。
「ほらよ、気が済んだか。この間の特務庁長官私邸放火事件の捜査だ。どうだ、文句ねえだろ」
「いいわ。それじゃあ、あなたたち全員の氏名、所属を言いなさい。それも義務でしょう」
毅然として権利を主張するゆり子に、班長はついにカッときたようだ。黙れっとほざくや否や、小銃の柄でゆり子の張った腰骨を殴打した。
「うっ！……」
あまりの痛さに身体をくの字に曲げてしゃがみ込んでしまうゆり子。
「こら、起きんかい！」
追い打ちをかけるようにゆり子のショートヘアをわし掴み、ぐいと引き立たせる。頭髪が剥がされるような力に従わされて、苦痛に貌を歪めてゆり子はよろよろと立ち上がった。そこへ激しいビンタが見舞われた。鼻も曲

がるような強烈なやつだ。ゆり子は悲鳴も上げられない。髪の毛を掴まれているので、身体を反らしてショックを和らげることもできず、頭がじーんと痺れてしまう。
　「なんだ、もう抵抗は終わりか、情けねぇ、口先だけだな」
　反対側の頬も打たれた。
　「いやっ、何するのよっ」
　ゆり子はこらえ切れず脚を振り上げ、班長を蹴ろうとする。武道に長けた海猫の捜査員が素人の女の攻撃にかかるわけもない。なんなくそれをかわし、
　「お、捜査妨害だ。逮捕しろっ」
　空々しく叫ぶと、ゆり子の腕をとって背中にねじ曲げた。悲鳴を上げ、卑怯者っ、と声を枯らしてもあとの祭り。後手に束ねられた両の手首にきりきりと手錠が食い込んだ。
　「連行しろ、放火事件の重要容疑者だ」
　ゆり子は左右の腕をがっちり固められ、頚根っこ押さえ付けられながら二三人の大男に引きずられていく。背中を丸め、比例して持ち上がった丸い臀部が苦悶に蠢くその姿はなんとも惨めで、サディステックな感情を擽るのだった。
　「さて――」
　顎にしたたる生汗を拭いながら、班長は毒牙の矛先を

女子大生たちに向ける。
　「そろそろ素直になる気になっただろう。両手を頭におけ。そして股を開くんだっ」
　今度は有無を言わせぬとばかり、他の捜査員も小銃をかまえ威圧する。
　「従った方がいいわ」
　ミカが部員に促した。しかしその眼は憎悪に燃えている。両手を頭の上に置き、肘を張って両脚をゆっくりと開けると無防備なポーズが出来上がった。少しでもそれを崩すと耳のすぐ近くで怒声を炸裂されて、小銃で小突かれる。
　班長が目を付けたのはむろん、高橋ミカだ。現代的な美貌は群を抜き、プロポーションも悪くない。腕を上げているため、バストのボリューム感は消えているが、そう小さいとは思えない。特筆すべきはヒップラインの美しさで、女子大生特有のプリプリした盛り上がりだ。しかしサディストの心をとらえるのはそれ以上にこの女の毅然としたふるまい、表情かもしれない。これだけ脅しているのに怯む事無く、野性的な反抗心をあらわにしているところが気に入った。コマンドならともかく、まだ尻の青い女子大生が天下の海猫を前にしてこれだけの態度をとれるのは、よほどの冷静さと激情を兼ね備えた高い理想と知性の持ち主なのだろう。
　（それがこの女の命取りになるわけだ……）

百戦錬磨の班長には自分の顔から一時も視線を外さずにきつい眼差しを向け続けている鉄火娘が、必ずやゲリラコマンドの一員となって中心を担うであろう将来が直感できる。そしてそうとなれば放置するのは海猫の使命が許されない。国家に対する反逆の赤い薔薇は、芽のうちに摘み取っておかねばならぬ。予防拘禁して収容所にぶち込み、シゴキにシゴいて矯正し、思想改造し、お国に役立つ優良婦女子として肉体も精神も生まれ変わらせるのだ。

「それではこれから身体捜査を行なうっ」

「なんですってっ」

班長の言葉に色をなすミカ。

「身体捜査なんて違法よっ。それに男ばかりじゃないの」

「女ならここにいるわよ」

突然響きわたる野太い女の声。廊下の方からだ。捜査員たちが一瞬に身を強ばらせ、整列して道ができた。

「これは最上課長、直々に……」

急に卑屈になった班長に手招き寄せられて入ってきたのは雲を突くような大女であった。１８０の後半はあるのではないか。しかも体格がごつい。ボディービルで鍛えられた身体はプロレスラーのごとき観を呈している。バストもヒップも１００以上はあるだろう。彼女はなぜか半袖、半ズボンの迷彩服をまとってい、黒のベレー帽

をかぶっていたが、にょきっと出現している両手両脚ときたら丸太といってもいいくらいだ。中央に巨大な獅子鼻を備えた貌は口もでかく、細い目とのアンバランスが醜悪さを醸し出している。
「班長、何、愚図愚図しているのよ」
彼女に並ばれると班長の影はまったく薄くなってしまう。
「はっ、学生が何かと権利を主張しまして……」
「学生？――」
最上課長が初めてミカたちの方を向いた。見下ろしたというべきか。
「ホホホ、これはまあ、可愛い小雀たちじゃない」
それでなくとも男性捜査員にチビらされていたミカ以外の部員は、むくつけき化物女の登場に腰が抜け、暴力的な眼光に負けてその場にへたり込んでしまった。
「最上桐……」
１６５センチのミカは頭二つ大きな最上課長を見上げ、そう呟いた。
「あら、うれしいじゃない。私の名前を知っている大学生がいるなんて光栄ね」
「あなたの悪い評判を知らない学生なんか、いない――」
ミカの気丈な言葉に最上桐は舌なめずりするように嗤った。

「どうやら、お前がてこずらせているようだね。さっさとお脱ぎ。私はこれから帰って、あの女コマンドの取り調べをしなければならないのよ、徹夜でね」
　治安局第四課課長、最上桐――彼女こそは海猫実働部隊の指揮官で、野辺地大洋局長の右腕とも腹心とも言われる怪女である。その冷酷さは野辺地をも凌ぐといわれ、何人のコマンドを廃人にしたかわからない。コマンドのテロ・ターゲットにリストアップされているのだが、襲撃をことごとくかわし、撃退している実力プラス強運の持ち主でもあった。
「す、少なくとも令状を見せるべきだわ」
「まあ、本当に生意気な娘ね。でもいい度胸してる。褒めてあげる。だけど――」
　と、桐はいきなりミカの顎をとって上を向かせ、自分は腰を屈めるようにしてじろじろと覗き込んだ。イカの臭いのする口臭を吹き掛けられて思わず貌をしかめるミカ。
「令状をとって服を脱がせるのは相手がレディの時だけ。お前のように小汚い醜女の痩せ犬にはもったいなくてよ。少しは化粧したらどうなの。見られたものじゃないわ」
　それを聞いていた班長は思わず苦笑する。課長の悪い癖がまた出たとばかり、他の捜査員と目くばせを交わす。桐は自分の気に入った女が手に入ると、とことん辱

めなければ済まない性癖があるのだ。これが始まると長くなるので頃合をみて止めに入らねばならない。もちろん彼女の機嫌を損ねないようにだが。
　「ふん、ノーブラね。おっぱいの形が崩れるでしょう、どれ――」
　と、ブラウスの上からごつい手の平で底から押し上げるように胸をまさぐった。
　「な、なにするのよっ」
　「ホホホ、やっぱりひどいものよ。この若さで全然張りがないわ。あらまあ、おまけに腋毛まではやしてる、不潔な娘ね」
　――「お前のような外人みたいに、アクの強い顔立ちにはこんな髪型は似合わないよ。チリチリにパーマをかけて赤く染めるといいんだわ」
　――「乳輪が巨きくて真っ黒じゃない。胎児でも妊んでいるんでしょう。お前のようなブスはこういう運動に首を突っ込んで男を漁るものと相場が決まっている。ほんとは売春婦より多淫なんだわ」
　もう、とどまるところを知らなくってきた。班長は機をみて口を挟んだ。
　「早く脱ぐんだよ。それともさっきの女のようにコテンパンにやられてから無理矢理剥ぎ取られたいのか。こっちはどっちでも構わないんだ」
　「やりたければやればいいでしょう」

　それまで桐の淫辣な罵りを唇を噛んで耐えていたミカは貌を紅潮させて言い放った。
　班長が、何をとばかり掴み掛かろうとするのを桐は押しとどめ、いきなり大声で笑いはじめた。
　「まったく久しぶりよ、こんなに威勢のいい女は。あの山上朋子だって私の前じゃぶるってたっていうのにさ。わかったよ、それに免じてここでの身体捜査は許してあげる。その代わり――」
　と、桐は背後の部下たちを見回してにやっと貌を歪めると、突如俊敏に振り向き、石のように硬い拳をミカの鳩尾に叩きこんだ。
　「うぐッ……」
　ミカは両手で腹を抱えるように二つ折りになって崩れ落ちる。打撃に息も出きず、白い歯並びとピンク色の歯茎をイーッと剥き出して苦痛に呻いた。そのミカを桐は軽々と肩に担ぎあげる。
　「その代わり、本署でじっくり調べてあげるわ。ほくろの数からお尻の穴の色まで全部ね、そうそう腋毛も綺麗に剃ってあげるわよ。ホホホ――」
　ミカを担いだ最上桐はそのままのしのしと部屋を出ていく。いかつい彼女の肩を支点に上半身を背後へ倒し、逆さ吊りの形で揺れているミカ。両手がだらりと下がり、それに絡みつくようにストレートロングの髪が垂れている。圧倒的な力に抑圧された悲哀が、露出した美し

いうなじに表れているようだった。
　班長が慌てて桐に声をかけた。
　「残った学生はどうします、課長」
　「裸体にしてお灸を据えてから離してやりな、もう二度と馬鹿な真似は考えないでしょう」
　最上課長はそう言って再び哄笑した。

美人弁護士登場

　旧式の快速電車は鼠色の車体を雨にうたせながら、千葉市に到着した。
　車両から吐き出された半数近くの乗客は、成田空港へ向う別の列車へ乗り換えるべく、指定のホームに急いでいく。残りの半数はこの新千葉駅周辺の、都市計画などまったく無視して林立しているオフィスビル群をめざすビジネスマンがほとんどだろう。雑多な国籍の男女は駅ビルを出ると、ことのほか雨足の強いのを知り、ある者は傘を拡げ、ある者は地下連絡通路に続く階段に消え、またある者は舌打ちしながら移民の運転するタクシーに乗り込んでいった。
　「まったく運輸省も考えてくれなきゃ。日本語が喋れない運転手じゃどうしようもないのにさ、ねえ……」
　タクシー待ちの行列に並ぶ初老の男がハンカチで濡れ

た髪や服を拭いながら、後の女に声をかけた。
　その女はにこりと笑っただけで、それ以上の反応を示さなかったが、もちろん反応などどうでもいいのであって、男は本来の意図どおり、女の美貌をまじまじと見つめることができた。
　黒い重そうなアタッシュケースを持った彼女は男より頭ひとつ大きい。１７０センチはあるだろうか。大柄な肢体を地味な色調の服装に包んでいる。ベージュのジャケットとスカート、幅の広いブラウスの白襟を表に返して、第一線でばりばり働く女性のコスチュームともいえる。厚い胸や腰の肉付きから察するに三十歳前後の女盛りと思われるが、なめらかな浅黒い肌のせいで年増女の印象は薄い。ボリュームのある黒髪を無造作にポニーテールにしていて、あらわな美貌は知性的で野性的だ。どちらかといえば濃い眉、大きな瞳、柿の種状の美孔を持つ癖のない鼻、やや肉厚の唇……。右の頬に十代の名残のような小さなプチッとしたにきびが見られるが、かえってこの女のワイルドな美しさにアクセントをつける感じで気にならない。しかし一方的に野性味が勝ちすぎているのだったらこうも人目を引かないだろう。彼女の表情の奥底には、どん底の哀しみを味わった過去のある女だけが見せる、ある情感が漂っていた。それに傷つきうちのめされ、そして這い上がってきたけなげさが、男の本能を刺激するに違いない。相反するような美しさの融

け合った独特の雰囲気が、この女にはあるのだ。
　男はうっとりと見惚れてしまう――いったいどこの会社で働いているのか、どんな仕事をしているのか。まったくその職場の連中は羨ましい。毎日こんないい女と顔を付き合わせていけるなら、退屈な毎日でもつらい仕事でも精がでるってもんだ。どこのコングロマリットだろう、畜生、いい女まで大手が独占する時代だよなあ……。
　「順番のようですわ」
　女が澄んだアルトの声で男を促した。
　「へ？……」
　女は手でタクシーを差し示した。タクシー待ちの行列は男のところで滞っていた。男は慌てて車の後部座席に上半身を乗り込ませる。何事か運転手と喋ったのち、再び車からでてきて、
　「さ、どうぞ、お先に。この運転手、日本人だから、ね」
　と、何十年もしたことのなかったウインクまでして見せる。
　「え、でも……」
　「まあまあ、いいからいいから。柄の悪い移民の運転手が多いんだから、こっちの方がいいって」
　男は女の二の腕を取り、肩を押すようにして勧める。軽く触っただけなのに女の肉の具合の良さが伝わってく

るようで、ズボンのなかのものが思わず硬くなる。
「それではお言葉に甘えてお先させて戴きますわ」
あまり断るのも失礼と思ったのか、女はタクシーに乗り込んだ。扉が閉まり、欝陶しい湿気と隔絶された冷房車に一心地ついたようにほっとため息をすると、女は行く先を告げた。
「埋立地の収容所まで――」
えっと振り返る運転手。もちろんこの辺りで仕事をしている運転手なら、それだけで十分である。番地などを告げる必要のないほどの公共施設だから、知らなかったらそれこそ移民の運転手だ。しかしこんな美人がまたどうして、とつい職分を忘れて聞き返してしまったのである。
女は苦笑する。こういう経験は初めてではないのだろう。
「特務庁第三収容所までお願いします。私に弁護を依頼した容疑者が首を長くして待ってますから、急いでください」
「ああ、弁護士さんで……」
運転手は合点がいったように車を発進させたが、女の美貌に動揺したのか、エンストしてしまう。
哀れにノッキングを繰り返して遠ざかっていくタクシーを初老の男はいつまでもぼんやりと見送っていた。
特務庁が直轄する収容所は全国に九つあって、この第

三収容所は唯一女子専用の収容所と医療収容所とで構成されている。全国各地で捕えられた女性政治犯や病質のある犯罪者はここへ集められて本格的な聴取が行なわれる。民主化され、ガラス張りになった警察や刑務所とは違い、治外法権のような隔離された空間がまだ残っていて、広く冤罪事件の温床となっているとかねがね批判の集中する特務庁収容所の中でも、この第三収容所の悪名はつとに名高い。もっともそれはほんの断片的に漏れてくる噂を根拠とするもので、なかなか実態がつかめない。とにかくここへいれられたら、ただでは帰ってこれないというのが、反体制運動をしている人間たちの一致した見方なのだ。不起訴になるケースはまずなく、かならず自白をさせて裁判に持ち込むことになっている。収容者の死亡率は他の収容所と比べても並はずれて高いし、稀に釈放されても精神に障害を負っているか、入所前とはがらりとおとなしい性格に変わっているか、どちらかで、そんなところから性的拷問や洗脳が横行しているのではないかとの噂も信憑性を帯てくるわけだ。

　千葉沖に造成された広大な埋立地はそのほとんどを工業地区として売り出されたものだから、収容所の四方は巨大プラントが連なって、長い無数の煙突から吐き出される灰黄色の煤煙が淀んだ大気をつくり、空はいつも低く垂れ篭めたスモッグ雲に隠れていた。

　収容所の塀は当然のように高く、訪れる者を威圧し、

塀の上に据え付けられたロボットカメラが始終首を振り、高圧電線がときおりスパークして青白い火花を散らしている。タクシーから下りた女弁護士は正門にある監視所に入っていき、所定の手続きを済ませる。
　氏名　森川恭子　　職業　弁護士　　性別　女　　年齢　三十一歳――。
　いちいち口頭で、能面のように無表情の男性職員に告げねばならず、いつもながら不愉快になる。嫌がらせは随所にあって、中に入るまでに徒労を覚えてしまうが、それが連中の魂胆と思えば、負けているわけにもいかない。
　収容所の敷地は広く、無人のカートに乗って移動しなければならなかった。カートの車体の差し込み口に監視所で発行された磁気カードを入れると地面に張り巡らされた走査線を辿って目的地につくシステムである。関係のないところで下りようものなら、有無を言わせず非常サイレンが鳴り、たちどころに逮捕されてしまうわけだ。
　森川弁護士は中央のブロックにある建物に入っていった。胸もとからハンカチを出し、額の汗を拭う。いつものことだが、収容所の建物に入っていくときにはある種の緊張感に包まれる。これから始まる仕事の重要さへの怖れとは違う。なにかここへ脚を踏みいれたら二度と出てはこれないのではないか。単純な恐怖心が彼女の胸を

覆うのだ。もう何度もそんな悪夢にうなされていた。
（ああ、敬一さん、恭子に力を貸して……）
森川弁護士は殺された夫の面影を思い浮べて、自らの弱気を打ち消した。
最上桐課長はそのグローブのような手を洗っていた。ちょうど午前中の詮議が終ったところである。今も耳に残る佐藤ゆり子のつんざく悲鳴。自分の指に絡みついているゆり子の頭髪――何度も髪を掴んで引きづり回し、床に貌を打ちつけた――を洗い流しながら、桐は反芻するように女コマンドののたうちまわる姿を思い浮べた。
（思ったよりしぶといわね、あの女。弱音を吐かなかったのは見っけものだわ。最後までこの最上桐様を罵って、とうとう失神しちゃったけど、まだまだ抵抗するでしょう。午後はあの桃尻を鞭でうちのめし、逆さ吊りにして陰毛焼きにしてくれる――）
それが駄目なら、あれをやってこれをやってと、次から次に拷問のアイデアが湧いて、鬼女課長の醜怪な表情はますます残忍さを帯てくる。あの肉づきのいい愛らしい鼻に玉の汗を浮かべ、縦皺をつくり、小鼻をひくひくさせるゆり子のこらえ貌を、桐は気に入ったらしくすこぶる機嫌がよかった。迷彩色の制服を正し、黒ベレーをかぶり直す。
洗面所を出たところで、収容所の職員につかまった。
「課長、昨日収容した女子大生の弁護士が来ています

が……」
　「何言ってるの。いつものように適当にあしらって追い返しなさい。何年、ここで働いているのよ。私はこれから野辺地局長のところにいかなければならないんだからね」
　大女の上司に見下ろされ、職員はビビりながら報告する。怠ればあとでもっとビビるハメに陥るのだ。
　「そ、それが、その弁護士というのが例の森川恭子でして……」
　その名前を耳にすると、桐の表情が見る見るうちに険悪になっていった。
　「あの森川恭子が来ている！　女子大生の弁護を担当することになったって！」
　怒髪天をつく荒声に職員は縮み上がる。
　「いつもの部屋で待たせており……」
　最後まで言いおわらぬうちに、桐は職員を突き飛ばし、のしのしと歩き出した。先程までの上機嫌はどこかに消し飛んで、憎悪と復讐のみが形相を支配した。
　（あのスベタの森川恭子が、あの黒ブタの森川恭子が、またまたこの最上桐の前に姿を現したと？　性懲りもなくまた私の可愛い小羊の弁護を引き受けたって！）
　最上桐と森川弁護士の出会い、または初対決は三年前に遡る。当時、桐は一般警察の女刑事としてエリート中のエリートコースを驀進していた時期であったし、また

そうするために一般警察としてはかなり強引な点数稼ぎをしていた頃でもあった。
　ある時、捕えた女性政治犯の口を割らせるために禁じられていた拷問を加えたことがある。その被疑者の弁護士がこれまた当時売出し中だった恭子だったのだ。恭子が若き美人弁護士で、マスコミにもちょくちょく貌を出し、ちょっとした有名人だった経緯もあり、桐にとっては激しい対抗意識を燃やすに十分な相手だった。弁護士の要求をことごとく突っぱね、逆に恭子をゲリラの一員であるかのように、嫌がらせの尾行を付けたりもした。恭子は恭子でこの不当な被疑者の扱い、弁護士への抑圧等をマスコミを使って宣伝し、反撃する。
　焦った桐は致命的なミスを犯してしまった。自白を取るのを急ぐあまり、女性政治犯を責め殺してしまったのである。もちろん辞職をよぎなくされた。恭子はたたみかけるように、殺人の罪で桐を告発する。
　進退極まったかに見えた桐であったが、捨てる神あれば拾う神あり、彼女の『才能』を高く評価していた特務庁が助け舟を出したのだ。野辺地局長を中心に桐自身もスタッフに加え、さっそく反撃にでる。まず、アンダーグランドの三流ジャーナリズムを動かして、森川弁護士の偏向性を強調するキャンペーンを張り、放送局にも圧力をかけて恭子を全マスコミから追放することに成功した。さらに玉枝一家をけしかけて、彼女の最愛の夫で同

じく弁護士をしていた敬一を惨殺する。桐の裁判も結局証拠不十分で無罪となり、晴れて治安局への奉職が認められた。
　この勝負は森川恭子弁護士の全面的な敗北に終ったのである。
　『海猫に盾をつくものがどうなるのか、見せしめのためにもとことんやらねばならないのだ』
　野辺地の言葉を聞きながら、最上桐はこの海猫こそが自分の才能や欲望を満たしてくれる場所であると知ったのである。しかし桐の森川恭子に対する怨念がすべて晴れたわけではない。現に恭子はまた弁護士活動を細々と再開したと情報網から聞いていたし、結局、特務庁という組織をもってしてようやく打ち倒したのだ。桐のプライドが著しく傷つけられた事実は厳然と残っている。いつか、必ずこの手で森川恭子を懲らしめてやる――決意は桐の胸の奥底に沈み、ふつふつと醸成していったのである。
　それが一気に吹き出してきた。森川恭子の名前を聞いた途端に。エリートコースから挫折して憔悴した日々がよみがえってくる。
　（でも私はあの時の最上桐ではない。一回りも二回りも大きくなって、残忍になって復活したのよ。ふふ、楽しみだわ。あの汚い黒い貌がどんなになっているか。抜群のプロポーションが熟れに熟れきって、さぞや責めご

ろの身体になっているはずだわ――）
　桐は別棟にある来訪者控え室に急いだ。
　「お久しぶりね。森川弁護士――」
　その声に、窓辺にたたずみ、押しつぶされそうなドス黒い熱雲を見上げていた恭子は振り返った。
　「……こんにちは。最上刑事、いえ今ではりっぱな最上課長ね」
　恭子は濃いエキゾチックな眉を少し吊り上げて笑う。彼女も高橋ミカの担当が最上桐であるのを知り、驚き、内心忸怩たるものをやっと整理したところであった。
　「フフ、相変わらずお綺麗で、相変わらずの皮肉屋だこと」
　桐は恭子の貌や肉体を無遠慮に眺める。貌は少し痩せたかもしれない。その方が小麦色の肌にマッチして野性的で似合っている。身体の方は予想どおり、豊満になっていた。プロポーションが強調されない服装だが、胸のふくらみや腰の丸みは同性の目にも魅力的だ。パットが入った肩がムッと盛り上がり、むんむんする三十女の色香がオーラのように放たれている。
　「最近、テレビでも拝見しないからどうしたのかと心配していたのよ」
　桐はせせら笑いながら握手を求めて手を差し伸べた。恭子はくっと顎をだすように桐を見返し握手をする。テレビに出演できないように画策したのは海猫ではない

か。桐のごつい手に包まれるように恭子の指の長いほっそりした手が隠れる。無言のまま握手をかわす二人。
　（ふん、そのうち握手じゃなくて足に接吻するお行儀を仕込んでやる……）

この章の残りは有料本編でお読みください。######

抵抗女優

　そのパーティはとくに秘密裏に開かれたわけではなかったが、さりとて大っぴらな宣伝をしたのでもない。それなのに、ここ大阪ミナミのクラブを借り切った会場には溢れんばかりの人が押し掛けてきている。この人数は尋常でない。
　『内藤基子さん一時帰国記念パーティ』
　正面の壁にかかった横断幕。まさにそのパーティには全国津々浦々から実に多様な人間が馳せ参じて来ていた。
　今や遅しと元大女優の登場を待ち焦がれて、立錐の余地もないフロア。手にカクテルの入った洒落たグラスを持っているものの、正装した男女ばかりでなく、ジーン

ズ履きの若者も目立っている。それは田村弓彦監督の孤高の運動に共鳴している若者から、内藤基子の熱狂的なファンまで、志に幅がある出席者の特徴を表していた。
　野辺地大洋も、その巨躯を黒のスーツに包んでつっ立っていた。胸のうちのごく一部に特務庁治安局局長としての仕事上の企みを持ち、しかし大部分は純粋なミーハーファンの意識をときめかせながら――。
　もちろん彼は正式に招待された客ではない。だれが秘密警察のドンを自分のパーティにすすんで招き入れるだろうか。それでなくとも盗聴やスパイ行為で理不尽にプライバシーへ侵入してくる輩なのだ。できれば顔も見たくない種類の代表である。けれども招待状を手に入れるのは野辺地の立場からすれば造作もない作業だった。なんなら部隊ごと乗り込み、御用御用と全員連行する強権だって発動できる。どうせ生意気な反体制女優のもとに集まる有象無象など、叩けば埃が出るに決まっている。
　しかし、それは、まだ早い。
　内藤基子にはとびきり贅沢な準備が必要であった。
　（なにせ、相手はそこらの跳ねっ返りの学生とは違う、お姫さまだからな。彼女にふさわしい用意立てをするのが、ファンのあるべき姿というものだ）
　野辺地はわざわざ招待状を盗ませ、偽造させたのである。
　この会場には部下の原田も潜入して出席者の写真を超

小型カメラに収めているはずだ。その辺に抜かりはない。
　野辺地のところに少女が寄ってきた。トレイにカクテルの入ったグラスが数個乗っている。ポニーテールを結った貌は細面で癖がなく、紺色のノースリーブのシャツから剥き出た二の腕やショートパンツをはち切らんばかりの素足の白さが眩しい。胸もヒップもかなりの成熟を見せているが十●、●歳だろう。むろんホステスとかコンパニオンなどではなく、ボランティアか何かなのだろう。
　「いかがですか――」
　声は稚さの残る可憐なものだが表情は素っ気ない。大人や男に媚びることを知らずに育ったのかもしれない。
　野辺地はグラスをひとつ取った。
　「お嬢さんも内藤基子のファンなんですか」
　五十男が精一杯の優しい笑顔をつくって尋ねる。第三収容所の女性収容者には一生目撃できぬ表情だ。
　「いいえ――」
　と、少女は心持ち険のある声でいい、
　「私は田村監督のファンです。別に奥さんなんかに興味ない」
　（ふふ、子供のくせにジェラシーを抱いてやがる）
　「田村監督の映画は素晴らしいよねぇ」
　「ええ、もう本当に」

と、うっとりするような目付きになり、
「代表作の『時の声』、ご覧になりました？　あんなに弱者の立場に立って権力に物言う姿勢を鮮明にする芸術家は他にいないでしょう？　日本の文化人なんてみんな海猫を恐がって何も発言しないんですもの、情けない。そう思われるでしょう？」
くりくりした瞳を輝かせ、若い義憤をぶつ少女。
（俺の身分を証したら腕にでも咬みついてくるんじゃないか。まったく我が国のティーンエージャーの乱れは極みだな。こういう娘は早いところ矯正せなければなるまい）
つい職業的な目で少女を見てしまい、少女は野辺地の眼光の陰湿さを鋭い感受性で察知したのか、ふと口をつぐんで身をすくめる。
「あっ、そ、そうだったね。うん、『時の声』は悪くない。僕もずいぶん評を書かせてもらったがね」
「あら、評論家の方でしたの」
少女はなんとなく納得したように、警戒の気色をといた。
「失礼ですがお名前は？」
「えーと、知らないんじゃないかな、海外のほうで活動しているから……それより君、喉が渇かないかい。ここは暑いものねぇ。そうだ、僕がジュースをおごってあげよう。田村監督のファン同士、お近付きの一杯だ」

「ナンパですか」
少女はクスッと笑った。そうナンパ、ナンパと野辺地も笑いながら少女の肩を抱くようにしてカウンターに向う。少女は別にためらわなかった。たぶん育ちのいい娘なのだろう。社会の不正義に対する憎しみは人一倍なのだが、本来は人を疑うことの知らない純な性格なのだ。
バーテンを呼んでコーラを注文した。照明がすーっと暗くなり、壇上にあがった司会者にスポットライトがあたった。客たちが騒めき、少女もそちらを見つめている。野辺地はバーテンが持ってきたコーラを受け取り、素早く懐中から仁丹大の錠剤の入った小さな容器を手にして、一粒二粒グラスに落とした。錠剤は飛び跳ねる炭酸の泡に紛れて一気に溶解した。
「さ、来たよ、飲みたまえ」
少女は野辺地の差し出すグラスをもらい、一口つける。
「喉、乾いていたんですよね」
そう言うと少女は初々しい唇をグラスの縁につけてごくごくと飲んでいく。白い喉を晒すように気持ちのいいほどの一気飲みだ。
「若いってのは羨ましいね、まったく。僕もあの日に帰りたいよ」
少女は濡れた唇を手の甲で拭い、横に置いていたトレイを再び持ちあげた。

「さあ、お仕事お仕事――」
　と、野辺地に礼を言うと少女は人込みに戻っていく。こちらに向けたショートパンツの可愛い臀部を眺めながら、野辺地は内心ほくそ笑む。
　（あと十数分もすればショートパンツを履いてきたことを後悔するに違いない。『華乱散』の効き目は凄いからな。まず乳首が硬くなる。痛痒さに驚いていると、お次はクリトリスの勃起が始まる。唾液が犬のように湧いてきて脳髄が痺れだす。その頃になると×××がびしょびしょに濡れて、パンツから染みだし、内腿に垂れてくる可能性は大ってわけだ。我慢できなくなってトイレへ駆け込み、おっぱいに爪を立て、股ぐらを掻き毟る。理性を忘れて自慰に没頭しているところへ、この野辺地大洋様が乗り込んで――）
　最近のバイオ漢方の目覚ましい発達は、遺伝子を操作して超催淫力を持った植物の根をつくり、少女をあっという間に多淫症に変貌させるのも朝飯前である。
　しかしそれはデザートで、まだ後の話だ。今は、そう、ようやく退屈な時局講釈をおわり、いかに今の日本に田村映画と内藤基子の内助外助の功が必要かをうたいあげ、美人女優の輝かしい経歴を紹介して、登場を促す司会者の声と大喝采のなか、壇上の袖から現れた四年ぶりの基子の美貌と肉体を、穴の開くほど見つめなければならない。それが今日の俺の最大の目的なんだからな

――野辺地はのしのしと巨体を揺すって人並みを掻き分け、前列に進んでいった。
　内藤基子は純白のイブニングドレスに肢体を包み、スピーチを始めた。野辺地の目に映る彼女は以前に増して光り輝いているように思えた。期待していたような着物姿でなかったのは残念だが、これだって全然かまはない。スポットライトに照らされて浮かび上がる基子――スピーチの最初に、今年四十を迎えました、と皆を笑わせた――は年齢相応の成熟と時の流れに抗する若々しさに溢れている。映画に出ていた頃より多少痩せたかもしれないが薄化粧に耐えられる美貌は衰えを知らず、ふっくらとボリュームをつけた黒髪が額をなかば隠し、肩まできたところで左右にカールしている。袖なしのドレスのために剥き出しているその肩はいくぶん贅肉が乗ったかもしれないが、かえって色香が増したところだ。それにつづく細腕や金鎖のネックレスが飾る胸もとの白さ、肌理の細かさときたらどうだろう。そしてわずかに覗ける胸の谷間は、巨乳へとふくらんでいくバストの豊かさの証明のように、深い。なにがそこらの中年女と違うといって、黒のベルトに締まった腰のくびれの艶やかさは際立っている。これがこの女のボディにパンチを効かせている特徴なのだ。いったいどうやってその細さを維持しているのか。
　それからそれから、と野辺地はカクテルを飲み干し、

視線のギラつきを隠そうともせず、基子の臀部を凝視する。くびれが再び腰骨のところからはりだして、これは大年増特有のムンムンするヒップラインを形成している。ハイヒールにほんの少し助けられてきゅっともちあがった双臀の量感は、思う存分捏ね繰り回してやりたい雄の衝動を沸き立たせるに十分だった。
　基子は深紅のルージュのひかれた美唇をマイク――これがどうしても野辺地にはペニスにダブって見えてしまう――に近付けて、ユーモアたっぷりに特務庁の跳梁を皮肉ったスピーチをしていく。
　「……彼らが頼りにしているのは、コンピューターに管理された市民の情報と、百年以上前のあの太平洋戦争中の特高のマニュアルでしょう。自分たちの頭で考えだしたものなど何もないのではございませんか。しかし我々のほうは違います。すくなくともあの時とは違う。その証拠にこのようなパーティが盛大に行なわれているんですから……」
　拍手と笑いが交錯する彼女のスピーチは歯切れがあって飽きさせない。この女の頭の良さを如実に表している。
　（なるほど危険人物だ……亭主のほうよりもずっと手強い敵になる。このまま放っておけばだが……）
　特務庁局長はそういう職業意識を心に浮かべつつも、それでもまだ内藤基子への憧憬のこもった視線は変わら

ない。非国民とはいえ、理想を持ち、誇りを崩さず、愛と信念を貫き通す彼女の人間性は美しい。外見だけではなく内面から滲み出てくるものが、今の内藤基子の美しさの秘密なのだろう。だとすれば彼女を逮捕し、収容所に放り込んで再教育する職務の遂行は、彼女の美しさに引導を渡してしまうことにならないか――。

（いや、それこそが俺の見てみたい内藤基子の姿なのだ）

と、野辺地は思いなおす。人間性を剥脱され――高橋ミカのように乳首と股ぐらにガムテープを貼られ――妻としての、女としての誇りを踏躙られてボロボロになっていく内藤基子。きっと精も魂も果てた彼女の姿は、ただの醜い大年増なのだろう。それだってかまわない。どうせこのまま野放しにしておいても、あと数年もたてばさすがの美貌も衰え、プロポーションも崩れていくのだ。内藤基子の女の盛りは今がピークで、もうなだらかな下降線を辿っていくに違いないとしたら、ここで俺の手でトドメを刺し、伝説のみを生かし続ける方策を考えても、ちっとも無益ではあるまい――。

「……なお同規模の集会は引き続き全国各地で行なわれる予定で……」

反体制映画監督夫人のスピーチは終った。万雷の拍手に彼女は深々とお辞儀をする。その際にわずかな瞬間覗けた豊満な胸のたわみに、会場の男たち、とくに前のほ

うの男たちはあんぐり口を開けて見惚れてしまう。
（けっ、偉そうなことを言っても男はみんな同じじゃねぇか）
自分だって思わず背伸びをしたくせに、野辺地は他の男たちを嘲笑する。
室内楽が再開され、場内はリラックスしたムードに戻った。基子は壇上を下りて、人々とにこやかに談笑をかわしている。まさに彼女のいるまわりだけが華やいで見え、カラー映像だった。
野辺地はできるだけ彼女の視線から外れたところで彼女を観察した。海猫の局長の貌を知っているものは少ないが、あの映画監督の妻となればわからない。用心はしたほうがいいだろう。しかし……理性的な行動を忘れてしまうほど、間近に見る内藤基子の語らっている姿は美しかった。笑顔のさいには印象的なえくぼが現れる。上品な手の動き、琥珀色のカクテルにつける唇の色っぽさ、ときおり黒髪を掻き上げるしぐさは妖艶でさえあるのだ。
旧友や支持者との挨拶が一段落して、ふとエアポケットのようにひとりぽつねんとたたずむ基子。野辺地はもう我慢できなくなってしまった。新しいカクテル――その中には当然『華乱散』を溶け込ませ――を調達し、彼女に歩み寄る。

######　この章の残りは有料本編でお読みください。　######

　　女豹狩りは夜仕掛けられる

　夜の八時をまわっているのに山手線内側の高層マンションにはちらほらとしか灯りがともらない。かつてアーバンライフを謳歌したヤッピーやディンクス、品のよい生活を営んでいたニューファミリーの一家団欒を忍ばせる痕跡は、黒い不気味なマンション群のシルエットからは感じられなかった。
　ミドルクラスの住民の流出はここ数年の現象だ。最初は生活環境の悪化が理由だったのだが、櫛のはが欠けるように空きはじめた彼らの住居に移民が移り住みはじめると、流出は一気に加速した。マンションやアパートにたったひとり移民が住民となっても、日本人の多くはそれを受け入れられず、郊外へ転出し、その集合住宅は廃墟と化すのである。住民の五分の四がいなくなると、ガス水道電気といった公共サービスは打ち切られるので、ますます拍車がかかる。どうも政府は暗黙のうちにそれを奨励している節があった。首都移転は噂だけではないのかもしれない。

　それでも仕事上住まざるをえない人間や、どうしてもここに住みたい人間たちは、自腹を切って自家発電機や小型ポンプを購入して環境を整備しなければならなかった。住民の大部分を占めるようになった移民の生活水準ではそういった高額商品は購入できないので、この夜の淋しさとなる。
　しかし、仕事のためならともかく、好んでこんなところにとどまる人間にはいったいどんな理由があるのだろう。よほどこの土地に親しみのある人間？　それとも思い出がしみついてなかなかそれを断ちきれない人間？　たとえば死んだ夫との幸福な生活の城であった部屋からどうしても抜け出せないでいる未亡人とか……。
　森川恭子もそんな一人かもしれない。
　彼女のいる二十五階建てマンションには現在彼女のほか日本人は一人か二人だ。あとは全部、移民である。もちろん恭子には人種的偏見はないので彼らを不快に思うことはなく、ただ弱者を切り捨てる政府の方針に憤りを覚えるのみだが、べらぼうに高い環境保持製品の維持費や修理費には音を上げている。それに最近では食料品店も少なくなり、車でかなり走らなければ買えなくなっているのが頭痛の種だ。やはり出ていくべきだろうか、と思う日はあるものの、殺された夫、敬一の位牌を見るたびに踏切りがつかなくなってしまう。
　（敬一さん、私は最後まで頑張るわ……あなたと暮ら

したこの部屋をそう簡単には捨てられない……）
　恭子は二十三階にある部屋の窓から冷え冷えとした街並を見つめながら枯れてしまったはずの涙を手で払うのである。
　しかし、しんみりと過去の思い出ばかりに浸っているわけにはいかない。彼女には弁護士としての苛酷な毎日の現実があるのだ。
　（くそっ、海猫の奴らときたら――）
　と、恭子は特務庁治安局の非道を思い返して舌打ちする。
　（どうしようもないわ。とくにあの最上桐……）
　冷酷な第四課課長はまだ、女子大生高橋ミカに対する面会を許さないのだ。もう一週間にもなるのにである……。
　恭子は服を脱ぎはじめた。遅い夕食の前にシャワーを浴びておきたかった。熱い湯を肌に浴びてとりあえずリフレッシュしなければ、これからの方針も思い浮かばないだろう。スカートを落として下着姿になる。小麦色の肌によく似合う水色のフルカップブラとパンティだけ。豊満なプロポーションはモデル並みの長身とよくバランスが取れて日本人離れしたグラマラスな魅力を見せている。バスローブを羽織り、下着を外した。黒髪にタオルを巻いて、バスユニットに入る。シャワーの蛇口をあけて湯加減をはかり、ローブを取った。蛇口を全開にして

総身に浴びる。気持ちよく湯滴が弾けて、一日の疲れや、高温多湿の真夏日に掻いた気味の悪い汗のまとわりが、さーっと流れ落ちていくようだった。
　充分に打たれた後、ボディシャンプーを両手につけ、彫りの深い貌を挟み込んだ。にきびの名残はあるものの、総じてなめらかな、小麦色した頬、濃い尖鋭的な眉毛、ちょっとしゃくれあがる感じの高い鼻の脇をゆっくりとマッサージしていく。片手をしなやかに頭上に持っていくと、腋毛が露出する。そこもかなりの密度でむっとしていた。丹念に白い泡粒にまみれさせる。したたり落ちる雫は、細い頚を流れて胸もとを通り、三十一歳の、成熟した未亡人のたわわな乳ぶさの谷間に消える。恭子は双乳の丸みを底からすくうようにして泡立ったシャンプーをまぶした。それはたぶたぶとした重量感とともに少しも垂れをみせない張りがあって、色素の沈澱した乳頭は肌以上に浅黒くはあるけれども、つんと上を向いているし、大きくも小さくもない乳輪はやや肉の盛り上がりをみせて何ともセクシーだ。両手は、くびれたウエストのラインからムンムンと肉がついて崩れのない腰へと下がり、深い切れ込みに分かれた双臀を、円を描くように撫でまわす。よじりあわせていた太腿をやや開き気味にすると、あらわになった股ぐらを内腿からさすり上げるように包み込み、ぬっと垂れるような陰部を清めていく。下腹に欝蒼と密生する逆三角形の恥毛は黒々と

艶があって縮れもほどよく、ふっくらとたたずむ女肉のまわりをも飾っていた。どちらかといえば肥厚のラビアは夫との肉交の豊富さを物語るように、焼けて、ほの黒い。ただ、その最奥へ重なる膣襞の色あいはまだサーモンピンクを残しているようだった。恭子の指が爪をたてないように気をつけながら、なぞっていく。もちろんアヌスのほうに這い込ませて洗いもする。

ひととおり、浅黒い全身に乳白色の液がまぶされると、再びシャワーが開かれた。眼を瞑り、ぽってりした唇をうっすらあけて、強い圧力の湯を受ける。流れ落ちていくシャンプーとともに、恭子は埃っぽい倦怠もまた洗い流され、颯爽とした活力を湛えた心と肉体を取り戻したような気がした。

――その時、来客を告げるチャイムが鳴った。

こんな時間に誰だろう？　今夜はアポイントメントはなかったはずだ。恭子は慌てて身体を拭き、とりあえずパンティだけ履いてローブを着た。頭のタオルをとって玄関までいく。とっくの昔にオートロックシステムは壊れていたし、節電のため防犯カメラも作動していないので、ドアの向こうにいるはずの訪問者を確認するには覗き穴を覗く原始的な方法しかない。

そこにいたのは宅急便会社のユニホームつけた若者だった。手に小荷物の入った段ボール箱を抱えている。

「高橋亮佑様からのお届けものです――」

　と、彼は人の良さそうな笑顔を見せて言った。高橋亮佑とは高橋ミカの父親である。つまり恭子の依頼人だ。今日会って励ましてきたばかりなのに、何か唐突のような気もしたが、弁護士への付け届け自体、珍しいものではない。彼らにとっては唯一の拠り所なのだから。
　バスローブ姿で火照り貌の女弁護士はロックを解除した。
　「夜分、ご苦労様――」
　差し出された受取証にサインをして、小包みをもらう。それが、やけに軽いのにいぶかりながらドアを閉めようとする――が、ドアは閉まらなかった。
　「……？」
　おかしいわと思い、もう一度試みようと、何気なく視線を床に落としてぎくりとした。扉と壁のすき間に硬そうな革靴が差し込まれているではないか。
　「何……！？」
　呟いているまに自分の腕力をはるかに上回る力で、ドアが引かれた。
　「あっ、あなたは！……」
　迷彩色の戦闘服に黒のベレー帽、筋肉隆々の大女、仁王立ちして意地悪そうな笑みをたたえていたのは、最上桐ではないか。彼女の背後には険しい目付きをした白手袋の屈強の男たちがたむろしている……。
　「おや、風呂にでも浸かっていたのかい。いいご身分

だね。こっちはこんな時間でもまだお仕事さ。とりあえず上がらせてもらうよ」
　と、最上桐はズカズカと玄関に踏み込んできた。その迫力に気押され、後退りする恭子。
　「な、何ですかっ、不法侵入だわっ」
　やっとそこまで言って押し止める。
　「なんの権限があってこんなことをするんです。ちゃんと説明しなさいっ」
　眦をあげる恭子に、桐はふんと鼻を鳴らし、
　「あら、御免なさいね。その格好、あんまり色っぽいものだから、あなたが弁護士さんだってこと、すっかり忘れていたわ」
　男たち――男性捜査員たちが下卑た忍び笑いを発した。恭子はむっとしながら衿ぐりを正し、怯えたところをおくびにも出さず、彼らを見返してやる。職業柄、修羅場には肝が坐っているのだろう。
　「あなたは森川恭子だね」
　「そうよ。呼び捨てにされる筋合いはないけど――」
　「生意気はおよしっ。森川恭子、あなたに家宅詮議の令状が出ているのよ」
　と、桐は胸のポケットから書面を掴み出して恭子に見せ付ける。恭子はそれを手にとり、いくぶん蒼ざめた表情で読んでいく。
　（フフフ、森川恭子、とうとう年貢の納めどきね！）

　美人弁護士を見る桐の瞳には溢れる自信と残忍な嗜虐の炎が燃えていた。
　「さ、もういいでしょ」と令状を奪いとり、「それじゃあ、始めるよっ」
　声を合図に、男性捜査員たちがどっと上がり込んできた。その数はざっと十数人。土足でどたどたと絨毯を踏み荒らし、家具を倒し、食器棚をあらわにする。傍若無人の彼らを、下唇を噛み、腕組しながらじっと見つめる恭子。憤辱にたぎる心を必死に押さえようとしている。令状は正式なものだったから抵抗しようもない。過激分子とのつながりの容疑らしいが、もちろん濡れ衣だ。海猫だってとっくに承知のはずである。これはようするに嫌がらせなのだ。高橋ミカの一件で激しく食い下がっている自分に対する恫喝なのだろう。我々はしようと思えば何でもできるのだぞ……。そう思うと少し落ち着いてきた。この部屋には押収されるような代物は何一つないのだから、心配はない。
　「着替えてきても、かまわなくてよ。ここは私たちがちゃんとやるからね」
　傍らの桐が恩きせがましく言った。しかし恭子は頚を横に振って拒否した。
　「あーら、いい度胸してるわね。身体自慢の弁護士さんなんて聞いたことがないわ。それとも、あなた、露出狂？」

　桐の揶揄を無視する恭子。しかし恭子の前を通る捜査員たちが、ときおり不純な視線をこちらに飛ばしてくるのは本当だった。いつもは男勝りの女弁護士が半裸でつっ立っているのだから、拝まないのは損とばかりじろじろと見ていく。むろん着替えたほうがいいのだが、この場を離れるわけにはいかなかった。彼らがなんらかの捏造をしないとも限らない。卑劣な罠に陥れられて捕まった反体制者は掃いて捨てるほどいる。火照っていたはずの肉体が、芯まで冷えてきた。
　捜査陣の手が寝室まで及ぶ。

　この章の残りは有料本編でお読みください。

　　蟻地獄・第三女子収容所

　「治安局第四課課長、最上桐っ、重要Ａ指定容疑者を連行したっ」
　桐がインターホンに向ってがなりたてる。
　数秒ののち、
　「声紋分析終了――」
　の合成音が聞こえ、彼女の前の、宇宙船の隔壁ハッチ

を思わせる分厚い超合金扉がゆっくりと開かれた。
　ここは千葉第三収容所地下三階にあるα収監区――通称モグラ房――の入り口である。
　「お前はいつか、この収容所の立ち入り調査を要求していたっけね。ようやく念願がかなったわけだ」
　桐は森川恭子の肩を乱暴に小突きながら中へ入っていく。醜怪な塞口器なるものを噛まされ、後手にがっちりと拘引されてきた恭子は、かなり体力を消耗しているらしく、ふらふらになっている。しかしその瞳の輝きは依然として変わらず、ときおり険しい視線を抑圧者たちに飛ばしていた。
　「これはこれは最上課長。じきじきに連行とは、ご苦労ですわね！」
　桐らを出迎えたのは三人の女たちだった。いずれも桐に負けないような体格をしている。グレーの制服に頭には桐と同じ黒のベレーをかぶり、手に短い棍棒を握っていた。二人は女監と呼ばれる、刑務所でいえば看守にあたるもので、背の高いほうが桂子、太っているほうが富子である。真ん中にいるのがこの収監区の区長、最上松――じつは最上桐の双子の姉だ。
　「当たり前よ、松。今日のお客さんは特別の処遇が必要な我々のお友達ですものね」
　そういって酷似したグロテスクな容姿の大女二人は、これもそっくりな高笑いをする。もちろん松にも森川弁

護士逮捕の報せは入れてあるから、先刻ご承知のはずだが、これみよがしの戯れが出てくるほど、その痛快さは二人の胸に共通していた。それほど今夜の獲物――森川恭子に対する海猫一党の恨みは深いのだろう。激烈な憎悪渦巻く敵陣に一人拉致された恭子は恐怖と闘いながらも、真昼の暗黒とも恥部とも呼ばれる中枢に脚を踏み入れたからには、その実態をつぶさに目撃し、あるいは身に刻み、不可能と言われる生還を必ずや成し遂げ、彼らの非道を広く国民に訴えて、政治犯を救援し特務庁の跳梁を粉砕する手がかりにするのだと、気力を奮いたたせるのだった。

「あーら、お久しぶり、おてんば弁護士さん！　いや違った、あなたとは初対面だったわね。でも初めてとは思えないほどあなたのお貌は前々から存じていてよ。その色黒の、生意気な、にきびヅラ！　その汚い貌と今日からずっと暮らしていけるかと思うと、ほんとに感無量ね！」

松は恭子の胸ぐらを掴んで前後に激しく揺さ振った。

「ううう……」

怒りと興奮に充血した瞳で松を見返す恭子。それをみて松は一瞬たじろいだ。この収容所に連れ込まれるとわかった女は、いくら強い精神力を持っていても、多少なりと怯えを見せるのが常なのだが、この女は違う。ただのインテリにはないたくましさがある。それは強靭そう

な体力とあいまって、我々の手を焼かせる要因になるだろう……ベテラン区長はそう直感し、しかしちっとも苦にならない。収容者のレジスタンスが激しければ激しいほど、彼女のファイトもまた増すのだ。嗜虐の熱が身体中から沸き上がってくるのだ。

「フフフ……」

と、嬉しそうに微笑みながら、

「それじゃ、とにかく手続きを済ませましょう。桐もコーヒーでも飲んで、ゆっくりしていきなさいな――」

そうさせてもらうか、と桐。彼女を交えて区長室に入っていく。恭子は二人の女監に挟まれて歩かされる。

「さて――」

区長のデスクの椅子に坐った松が言った。横のソファには桐がふんぞり返っている。

「もういいわ。手錠と塞口器を外しておあげ」

上司の命令にきびきびと従う女監たち。手錠に鍵が差し込まれ、後頭部のベルトが解かれた。

「ハァーッ……」

息苦しさから解放され、紫色に変わっていた手首から上に血の気が戻っていく。口のまわりからあごにかけて、乾いてこびりついた涎の残滓をこする。くわえ込まされていた拷問具のおかげであごが疲労しうまく喋れるかどうか……なんとか呂律くらいはまわりそうではあるが。

「だいぶ、応えたでしょう。でも自業自得なのよ。これは容疑者が暴れて手に負えないときに使用する器具だからね。今後、厄介にならないようにおとなしくすること、わかった？」
　恭子はふんと嘲笑して松を無視し、室内をゆっくりと見回した。
　「女の職場にしては殺風景じゃないかしら？　時間があったらお花でもいけてあげるわよ」
　と、勇ましくもへらず口を叩いた。松の表情がにわかに厳しくなる。
　「いい？　よくお聞き！　海猫にある辞書の、暴れる、という言葉の定義には、暴徒と化すという意味はもちろん、暴言を吐いたり、極度に反抗的な表情をあらわにした場合も含まれるんだよ。お前のような生意気な貌はそれだけで要注意だから自覚するんだね！」――「ここではお前がシャバでどんな職業をしていたか、どんな地位にいたかなんて、まったく気を使わないんだ。ここに入ってきた女はみんな、今までの反社会的な精神や行動を悔い改め、国家に役立つ優良婦女子になるよう日々努力していくのさ。そのために我々が一肌脱いでやっているんだ。人様のお金でただ飯喰わせてもらうのに、そのうえ文句まで言ったら、容赦しない。じっくり反省させてやるからね！」
　松のまったく転倒した論理は馬鹿馬鹿しくて聞いてい

られない。
　「こんな扱いを受けるのは不当だけれど、百歩譲って容疑があるとしても、犯罪が確定する前の容疑者を、矯正機関に同時に委ねるなんて、あまりにも横暴だわ！もちろん私は無罪で、これは冤罪ですけどね。それが明明白白になった暁には、あなたたちにはそれ相応の責任をとってもらうわ！」
　恭子の声は荒々しいけれども、ヒステリックではない。
　「すぐに自白したくなるさ」
　と、コーヒーを啜っていた桐が言った。
　「お前も弁護士だから知っているだろ。ここに入って自白しなかった女はいないんだ。それだけ捜査の目がたしかだってことさ。論理を追ってどうだどうだと詮議すれば、みんな最後には、私が悪うございました、と頭を下げるんだ」
　「論理って拷問の論理のことかしら――」
　一歩も引き下がらない恭子に桐はむっとし、松は苦笑する。
　「まあ、いいわ。収容者と議論したってはじまらない。収容所の方針に収容者が逆らったら、罰するのは監督者として当然の権利よ。それが不満なら、どうぞ、訴えるなり何なりしたらいい。こっちの知った話じゃないわ」

と、松は眼鏡をかけて書類を開いた。
「とりあえずここの規則を教える前に、まず身体検査ね」
恭子の表情が強ばる。
「冗談は止して！　さっきやったでしょうっ」
「さあ、私たちの管轄外で行なわれたものについては知らないよ。ここではここのやりかたがある。拒否するんなら力付くでするだけよ」
恭子は唇を噛みしめた。この連中には何を言おうと無駄なのだ。ただただ被疑者をおとしめ、辱めるのが目的なのだから。

この章の残りは有料本編でお読みください。######

トロかされた肉饅頭の脳髄

β収監区――ここがネズミ房と呼ばれているのは、モグラ房・α区の上階にあたるためで、つまりモグラよりもネズミのほうが陽光に近いところで生活していることに引っ掛けているらしいのだが、それだけではどうやらない。ネズミの旺盛な繁殖能力のイメージが、不良女子

に対する医療矯正の実験研究を、主な任務と称するこの収監区のテーマに合致するからに他ならない。
　『子だくさんは婦女子の使命』
　これは、モグラ・ネズミ両房の収容者がことあるごとに唱えさせられる収容者心得の重要なスローガンのひとつでもあった。
　治安局局長、野辺地大洋は久しぶりにβ収監区を訪れていた。視察の名目だが、ようするに目の保養、命の洗濯である。
　ここの責任者の医療長、岩代清三と連れだって、治療房に向う。
　「治療は進んでいるのかね」
　野辺地は隙のない、武道者特有の歩き方をしながら聞いた。
　「まあ、進んでいるといえば、進んでいるし、進んでいないといえば、そうとも言えますな」
　と、なぜか楽しそうに笑う岩代は、野辺地よりやや年下で、眼鏡をかけ白衣を着ていた。
　「つまり、他の被治療者全体の平均ペースから見ればずいぶんと遅いが、この被治療者の個体差を考慮に入れると、そこそこ進んではいると、言うこともできるわけで……」
　「フフフ、まわりくどいな、医療長。ようするにネズミ房はしぶとい女を手に入れられて、万万歳なんだろ

う」
　「まったく野辺地局長のおっしゃる通り。アングロサクソン系で高学歴のサンプルは手に入りにくいんで、思う存分、やらせて戴いております」
　二人は下卑た笑い声をあげながら、治療房へ入っていく。廊下の両側にいくつか並んでいる部屋のうち、岩代が開けた扉には『特別』の文字が重々しく書かれている。一歩脚を踏み入れると、野辺地は病院独特のきつい薬臭に顔をしかめた。
　「安藤君。覚醒作業は終ったかね？」
　岩代が声をかけたのは助手の安藤である。白衣の他に大きな白いマスクをかけていた。
　「終了しました。まだ朦朧とはしていますが――」
　安藤は医師用の薄皮のゴム手袋をはめた手で敬礼する。
　部屋の中央に黒革張りのベッドが置かれていて、その上には丸裸の白人女がＸ字型に固定されていた。両手を万歳の格好に広げ、両脚も内腿の筋が浮き上がるほど開かれて、四肢を拘引されているその白人女こそ、行方不明になったあの人権擁護委員会の調査員、ナンシー・マクガイアだった。
　目の覚めるようなブロンドヘアを、髪はもちろん、腋の下や股間にたっぷり湛えたミセス・マクガイアの肉体はグラマラスで、まったりと脂がついた肩や、自らの重

みにやや潰れ気味の巨乳――乳頭は日本人のこの年代の女には考えられないほどのピンク色をしてい――そして豊かな腰付きは大年増を思わせるように完熟している……そんな女の色香を満開にしている肉体とは裏腹に、彼女の表情は冴えないものだった。かつては活動的な印象を振りまいていたはずのショートヘアは、手入れをされていないらしくバサバサに跳ね上がり、彫りの深い貌の、とくに際立って高い鼻は美しく理知的な感じを醸し出してはいたが、目のしたに隈ができ、やつれている。たしかに安藤の報告したとおり、意識はあるようだったが、紺碧の瞳は虚ろで視点が定まらず、ときおり苦しそうにする咳も弱々しい。

「わかるか、１７３号。俺だぞ、野辺地大洋様だぞ。目上の者にはちゃんと挨拶するんだったろ。ン？」

野辺地はナンシーのあごを掴んで自分の方を向かせ、貌を覗き込む。

「無理ですよ。五日間の睡眠療法を受けて覚醒したばかりなのですからね。いくら１７３号といえどもすぐには――」

コーヒーポットを安藤から受け取った岩代が、カップにそれを注ぎながら言った。

「フフ、薬漬けにして、一刻も目覚めさせなかったというわけか。もう何週間、続けてる？」

「かれこれ、三週目に入ったところですかな。その

間、意識が戻っていたのは二、三日ですか……」
　「その二三日さえも、二十四時間、セックス療法にどっぷりハメられ金髪振り乱してるってわけだ」
　「まあ、二十四時間というのは大げさですけれどね。おかげで１７３号の攻撃的精神疾患もかなり矯正されつつあります――ではちょっと失礼して……」
　岩代は注いだコーヒーを自分の口に含み、ナンシーと口吻をかわす。口移しされるブラックコーヒーのほとんどはナンシーの口もとから頬へ、そして白いうなじへと垂れ落ちていく。しかし一旦、舌がコーヒーの味を知覚すると、ナンシーはどこか獣じみた音をたてて、ズルズルと啜り、貪り始めた。岩代は三度、それを繰り返し、ナンシーにコーヒーを飲ませた。
　「なにせ、点滴と鼻孔からチューブを差し込んでの栄養剤投与だけですからね。心はともかく身体は飲食を欲しているのです」
　安藤が解説した。
　野辺地は彼女を眺めながら、ある感慨に耽ってしまう。
　「こんなザマを見せられると、あの火のように暴れて手に負えなかった頃のナンシー・マクガイアが懐かしくなるな。ちょっと惜しいような気もする……」
　「そうですな。でも昔ほどではないにしろ、まだまだ手を焼かせますからな。今日はいちばん嫌悪している局

長のお出ましですからどういう反応を見せるか、面白いデータが取れるかもしれない」
　ようやく唇を離した岩代が言った。ナンシーはコーヒーが効いてきたのか、いくらか正気を取り戻してきたようだ。
　「おはよう、１７３号――」
　と、岩代はペンライトでナンシーの瞳に光を当てながら、口調も重々しく問診する。
　「気分はどうだ。爽快か？　五日間も眠りこけていたのだから、悪いはずはなかろう。１７３号、今朝はな。珍しいお方がわざわざお前の更正ぶりを見学に来られたぞ。覚えているだろう。治安局長の野辺地大洋様だ」
　岩代はブロンドを掴み、野辺地へ顔を向かせる。
　「ああ……」
　ナンシーは野辺地を確認し、舌足らずの声を上げた。
　「フフ、久しぶりだな。ミセス・マクガイア。海猫の高い医療技術のおかげでだいぶおとなしい性格になってきたと言うじゃないか。今日はたっぷり見せてもらうぞ。慢心せずに励めよ」
　野辺地の言葉をいやいやと頸を振って嫌悪するナンシーの瞳は依然としてどこか霞みがかかっている感じだったが、必死に気力を呼び起こそうとしている。
　「ううッ……だめ……洗脳なんかされない……」
　「フン、いくら強情を張っても無駄だ。現にもう英語

が喋れなくなっているだろう」
　そう岩代に指摘されるとミセス・マクガイアは、はっと表情を強ばらせた。彼女は学生時代日本に留学した経験もあるし日本の調査を担ってきたくらいだから日本語はぺらぺらなのだが、ここに連れ込まれて以来、母国語の使用を禁じられ日本語を強制的に学習させられた処遇に反発し、英語でしか話さなかったのだ。
　「これも、睡眠学習の効果ですよ」
　と、岩代。眠っている間にヘッドホンから日本語を流し続け、また特殊な薬物を投与して脳に刷り込ませるというのだ。ナンシーはおろおろと狼狽して、英語を思い出そうとするのだが、ほとんど切れ切れの単語程度しか浮かんでこない。五日前に意識を取り戻したときにはまだどうにか易しい文法は使えたのに……。
　「ああ！　ひどい……こんなことって……」
　ナンシーは絶望的にがぶりを振る。
　「いいじゃないか。どうせお前の国の政治家どもはお前を見捨てたんだ。そんな国に未練はあるまい。それより日本はいいぞ。お前のような外人でも二級国民としてちゃんと扱ってやる」
　「いや、私はアメリカ人よっ、日本人になんかなりたくない！」
　「こらっ、ブタ饅頭。日本人の血税でタダ飯食ってるのに、恩を仇で返すような御託を言ってはいかん。それ

に日本人の女として生まれ変わるには男性にそんな言葉使いをしては駄目だと言ってるだろ。どうやら今日もセックス療法でシゴかねばならんようだな」
「いやぁーッ」
岩代はナンシーの乳ぶさを根から絞り上げ、突き出た乳首を指で弾いてやる。驚いたことに、乳首はあっという間に充血してきてきつく勃起しはじめた。野辺地は思わず目を見張った。
「……そしてまた百二十時間の強制睡眠、それからまたまたセックス療法。お前が危険思想を捨て反抗的態度をやめるまで、いつまでも続けられるんだ」
岩代は医師的な手際の良さで、もう片方の乳ぶさにも同様のマッサージを加えていく。
「いくら体力のある白人女でも、あと二、三回が限度だ。性的昂奮だけが脳組織に植え付けられ、他の事象についての好奇心は減退していく。知能指数の低下も著しくなる。もうすぐ肉体的刺激を与える前に、副次的情報、すなわちペニスの形とか、臭い、色等を提示すると、愛液の分泌、乳首、陰核の硬起などの反応を見せるようになるだろう。つまりパブロフの犬のように条件付けされてしまうわけだ」
「ああ、パブロフの犬なんて絶対、いや……」
そう叫ぶと、ナンシーは精神の安定を失ったようにぼろぼろと涙を流し始めた。

（ここが以前とまったく違う反応だな――）
　野辺地は思う。以前だったら決して泣き顔を曝す屈伏などはありえなかったのだ。抑圧者に歯向かい、罵り、隙あらば噛みつき足蹴りしようとする。激しい拷問に抵抗した末、ついに意識を失って悶絶する、それがナンシー・マクガイアの姿だった。今、野辺地の目の前で双乳を弄ばれ、生汗の掻いた貌を歪め泣いている金髪女には、惨めなヒステリーがあるだけで、凄絶な誇らしさは消えている。
　たっぷりバストマッサージを施した後、岩代は安藤とともに、天井からぶら下っている三つの滑車を調節し、そこから三本のテグス糸を下ろしてきた。

　以下は有料本編でお読みください。
######